

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 特許公報(B2)

(11) 特許番号

特許第5064623号
(P5064623)

(45) 発行日 平成24年10月31日(2012.10.31)

(24) 登録日 平成24年8月17日(2012.8.17)

(51) Int. Cl.		F I
A 6 1 K 8/92	(2006.01)	A 6 1 K 8/92
A 6 1 K 8/89	(2006.01)	A 6 1 K 8/89
A 6 1 K 8/06	(2006.01)	A 6 1 K 8/06
A 6 1 Q 1/10	(2006.01)	A 6 1 Q 1/10

請求項の数 2 (全 11 頁)

(21) 出願番号	特願2001-292661 (P2001-292661)	(73) 特許権者	000145862 株式会社コーセー 東京都中央区日本橋3丁目6番2号
(22) 出願日	平成13年9月25日(2001.9.25)	(74) 代理人	110000590 特許業務法人 小野国際特許事務所
(65) 公開番号	特開2003-95874 (P2003-95874A)	(72) 発明者	音 智子 東京都北区栄町48番18号 株式会社コーセー研究本部内
(43) 公開日	平成15年4月3日(2003.4.3)	(72) 発明者	奥山 雅樹 東京都北区栄町48番18号 株式会社コーセー研究本部内
審査請求日	平成20年9月9日(2008.9.9)	(72) 発明者	三井田 淳 東京都北区栄町48番18号 株式会社コーセー研究本部内
前置審査			

最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 睫用化粧品

(57) 【特許請求の範囲】

【請求項1】

キャンデリラレジンと平均粒子径0.1~30μmの球状シリコン系樹脂粉末と水を含む、全組成中のキャンデリラレジンの配合量が0.1~30質量%であり、球状シリコン系樹脂粉末の配合量が0.1~25質量%であることを特徴とする水中油乳化型睫用化粧品。

【請求項2】

マスカラである請求項1記載の水中油乳化型睫用化粧品。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、睫用化粧品に必要な目元をはっきりさせるという化粧効果及び持続性、仕上がりの膜の均一性に優れ、また使用性が良く安全性、安定性も良好であり、樹脂特有の臭いを低減させたメイクアップ化粧品に関するものである。

【0002】

【従来の技術】

従来、睫用化粧品において目元をはっきりさせるという化粧効果は、ワックス類、樹脂類、皮膜形成剤等を配合することにより、睫への密着性を高め、睫を太く目立たせたり、長く見せたり、睫を上カーンして目元を際立たせていた。更に、これらの系に粉体を配合することにより、塗膜のべたつきを防止し、睫の束付きを防ぐことにより、更に効果的に

目元を際立たせること等がなされてきた。

【0003】

【発明が解決しようとする課題】

しかしながら、従来のワックスや、ロジン酸誘導体に代表される樹脂等はいずれも高融点で、常温での柔軟性、付着性に乏しいものが多く、このため、睫への付着性が乏しく、睫を太く見せる効果が不十分であったり、塗膜の柔軟性に乏しいため睫のカーブが直線的になりやすい等の問題があった。また十分な効果を得られる程度配合すると、製品における伸びが悪くなる等の使用性の低下や、伸びが滑らかでない等の使用感の低下につながる。また同時に、べたつきを防止するために配合される粉体量が増加し、化粧膜が不均一になったり、化粧もちが悪く、経時でののがれ等が見られる。更にこれらの樹脂は特有の臭いを有し、且つ経時的にその臭いが強まる傾向があるため、多量に配合した場合は臭いの点で好ましくないという欠点があった。

10

【0004】

【課題を解決するための手段】

そこで本発明者らは、上記課題を解決するために鋭意研究した結果、キャンデリラレジンと球状粉体とを含有することにより、使用性、使用感に優れ、目元をはっきりさせる効果やその持続性、仕上がり膜の均一性に優れ睫用化粧料が得られることを見出し、本発明を完成するに至った。

すなわち、本発明はキャンデリラレジンと球状粉体とを含有することを特徴とする睫用化粧料に関するものである。

20

【0005】

【発明の実施の形態】

以下、本発明を詳細に説明する。

本発明に使用されるキャンデリラレジンとは、キャンデリラワックスを有機溶剤にて分別抽出して得られる樹脂分で、樹脂分が好ましくは65質量%（以下、単に「%」で示す）以上、更に好ましくは85%以上の割合で含有されるものである。

この分別抽出の方法としては、例えば、キャンデリラワックスにエタノールを添加して水浴上等で加熱することによりキャンデリラワックスを溶解する。次に、これを常温まで冷却して、ワックスの結晶を析出させ、これを濾過することにより結晶と濾液とに分ける。樹脂分は濾液中に溶解しているため、濾液中のエタノールを蒸留回収することにより、樹脂分を得ることができる。

30

また、キャンデリラレジンの軟化点は35～55 が好ましく、例えばINCI名（International Nomenclature Cosmetic Ingredient labeling names）でキャンデリラワックスエキストラクト等が挙げられる。軟化点の測定方法としては、化粧品原料基準一般試験法軟化点測定法に準じ、試料量0.5g、昇温速度0.2 /分、12mm、10gの鉛球を用いて行う。

本発明に使用されるキャンデリラレジンの配合量は、全成分中0.1～30%が好ましく、更に0.5～20%であることがより好ましい。キャンデリラレジンには柔軟性、及び付着性に優れ、この範囲であれば、睫をカーブアップさせたり、重ね付けにより太く見せ、ボリューム感を演出するといった化粧効果や持続性、安定性、使用性、使用感の点で満足

40

【0006】

本発明に使用される球状粉体としては、通常化粧料として用いられる粉体であり、その形状が球状、真球状であれば特に限定されず、多孔質、無孔質等の粒子構造は問わない。例えば、ナイロン、ポリアクリロニトリル、ポリエステル、ポリスチレン、ポリプロピレン、ポリエチレン、四フッ化エチレン、ポリメタクリル酸メチル、シリコーン、セルロース等の有機球状粉体、ケイ酸マグネシウム、ケイ酸カルシウム、酸化チタン、無水ケイ酸等の無機球状粉体が挙げられる。またこれらの、有機-有機粉体もしくは無機-無機粉体、もしくは有機-無機粉体のように組み合わせられた複合粉体も挙げられる。上記球状粉体のうち、好ましいものはケイ素含有粉体であり、その中でもシリコーン系樹脂粉体及び無水

50

ケイ酸が更に好ましい。シリコーン系樹脂粉体としては、ポリオルガノシロキサンエラストマーやシルセスキオキサン粉末等が挙げられるが、睫毛化粧料に配合した際、延展性に優れ、柔軟性を有し、べたつきのない良好な使用性と均一な化粧膜を付与することができるという点においては、ポリメチルシルセスキオキサン粉末を用いることが最も好ましい。市販品としては、トスパール105、トスパール120、トスパール130、トスパール145、トスパール240、トスパール3120、トスパール2000、(以上、東芝シリコーン社製)や、KSP-100(信越化学工業社製)等があげられる。また無水ケイ酸としてはゴッドボールシリーズ(鈴木油脂工業社製)、シリカマイクロビードシリーズ(触媒化成工業社製)、サンスフェアシリーズ(旭硝子社製)、サイロスフェアシリーズ(富士シリシア化学社製)等があげられる。本発明に使用される球状粉体の平均粒子径は0.05 μ m~100 μ mが好ましく、さらには0.1~30 μ mが好ましい。

10

本発明に用いられる球状粉体の配合量は、全成分中0.1~25%が好ましく、特に1~15%が好ましい。この範囲で用いれば、べたつきを防止し、スライド性優れ、化粧膜の均一性を保ちながら、重ね付けすることが容易なものが得られる。また、これらの球状粉体は必要に応じて、1種又は2種以上用いることができ、その表面を油剤処理、シリコーン化合物処理、フッ素化合物処理、金属石鹼処理、界面活性剤処理、アミノ酸系化合物処理、水溶性高分子処理等を施してあってもよい。

【0007】

本発明のメイクアップ化粧料は、上記した必須成分の他に、通常化粧料に使用される成分、例えば、付着性や持続性、安定性を向上させる効果を持つ被膜形成性エマルジョンポリマーや、睫を長く見せる効果を付与するための繊維や、感触調整や着色の目的で粉体成分や、基材、エモリエント成分として油性成分、保湿、粉体分散剤として水性成分、粉体分散、感触調整のための界面活性剤、紫外線吸収剤、保湿剤、水溶性被膜形成性樹脂、褪色防止剤、酸化防止剤、消泡剤、美容成分、防腐剤、香料などを本発明の効果を損なわない範囲で適宜配合することができる。

20

【0008】

被膜形成性エマルジョンポリマーとしては、高分子化合物を水性溶媒に分散したもので、通常化粧品に使用されるものであれば特に制限されず、いずれのものも使用することができる。例えば、(メタ)アクリル酸・(メタ)アクリル酸アルキル共重合体エマルジョンポリマー、(メタ)アクリル酸アルキル共重合体エマルジョンポリマー、(メタ)アクリル酸アルキル・スチレン共重合体エマルジョンポリマー、ポリ酢酸ビニルエマルジョンポリマー、ビニルピロリドン・スチレン共重合体エマルジョンポリマー、シリコーン系ポリマーエマルジョン等が挙げられるが、中でもポリ酢酸ビニルエマルジョンポリマーが望ましい。これらのエマルジョンポリマーは、必要に応じて、1種又は2種以上を使用することができる。

30

【0009】

繊維としては、ナイロン、ポリエステル等の合成繊維、レーヨン等の人造繊維、セルロース等の天然繊維、アセテート人絹等の半合成繊維等が挙げられ、これらは特に限定されるものではなく、必要に応じて1種又は2種以上を用いることができる。また、これらの繊維は一般油剤、シリコーン油、フッ素化合物、界面活性剤等で処理したのもを使用することができる。このうち、ナイロンを用いる場合には、長さは0.3~3mmのものが好ましく、太さは0.1~20デニールのものが好ましく、更には0.5~10デニールのものが好ましい。

40

【0010】

油性成分としては、動物油、植物油、合成油等の起源、及び、固形油、半固形油、液体油、揮発性油等の性状を問わず、炭化水素類、油脂類、ロウ類、硬化油類、エステル油類、脂肪酸類、高級アルコール類、シリコーン油類、フッ素系油類、ラノリン誘導体類、油性ゲル化剤類等が挙げられる。具体的には、流動パラフィン、スクワラン、ワセリン、ポリイソブチレン、ポリブテン、パラフィンワックス、セレンシンワックス、マイクロクリスタリンワックス、ポリエチレンワックス、エチレン・プロピレンコポリマー、モンタンワッ

50

クス、フィッシュアトロブシュワックス等の炭化水素類、モクロウ、オリーブ油、ヒマシ油、ホホバ油、ミンク油、マカデミアンナッツ油等の油脂類、ミツロウ、カルナウバワックス、キャンデリラワックス、ゲイロウ等のロウ類、セチルイソオクタネート、ミリスチン酸イソプロピル、パルミチン酸イソプロピル、ミリスチン酸オクチルドデシル、トリオクタタン酸グリセリル、ジイソステアリン酸ポリグリセリル、トリエイソステアリン酸ジグリセリル、トリベヘン酸グリセリル、リンゴ酸ジイソステアリル、ロジン酸ペンタエリトリットエステル、ジオクタタン酸ネオペンチルグリコール、コレステロール脂肪酸エステル、N-ラウロイル-L-グルタミン酸ジ(コレステリル・ベヘニル・オクチルドデシル)等のエステル類、ステアリン酸、ラウリン酸、ミリスチン酸、ベヘン酸、イソステアリン酸、オレイン酸、12-ヒドロキシステアリン酸等の脂肪酸類、ステアリルアルコール、セチルアルコール、ラウリルアルコール、オレイルアルコール、イソステアリルアルコール、ベヘニルアルコール等の高級アルコール類、低重合度ジメチルポリシロキサン、高重合度ジメチルポリシロキサン、メチルフェニルポリシロキサン、デカメチルシクロペンタシロキサン、オクタメチルシクロテトラシロキサン、架橋型オルガノポリシロキサン、フッ素変性ポリシロキサン等のシリコーン類、パーフルオロデカン、パーフルオロオクタン、パーフルオロポリエーテル等のフッ素系油剤類、ラノリン、酢酸ラノリン、ラノリン脂肪酸イソプロピル、ラノリンアルコール等のラノリン誘導体、デキストリン脂肪酸エステル、蔗糖脂肪酸エステル、デンプン脂肪酸エステル、イソステアリン酸アルミニウム、ステアリン酸カルシウム等の油性ゲル化剤類等が挙げられる。

10

【0011】

20

粉体成分としては、板状、紡錘状、針状等の形状、粒子径、多孔質、無孔質等の粒子構造等により特に限定されず、無機粉体類、光輝性粉体類、有機粉体類、色素粉体類、複合粉体類、等が挙げられる。具体的には、コンジョウ、群青、ベンガラ、黄酸化鉄、黒酸化鉄、酸化チタン、酸化亜鉛、酸化アルミニウム、酸化セリウム、二酸化珪素、酸化マグネシウム、酸化ジルコニウム、炭酸マグネシウム、炭酸カルシウム、酸化クロム、水酸化クロム、カーボンブラック、ケイ酸アルミニウム、ケイ酸マグネシウム、ケイ酸アルミニウムマグネシウム、マイカ、合成マイカ、合成セリサイト、セリサイト、タルク、カオリン、炭化珪素、硫酸バリウム、ベントナイト、スメクタイト、窒化硼素等の無機粉体類、オキシ塩化ビスマス、雲母チタン、酸化鉄コーティング雲母、酸化鉄雲母チタン、有機顔料処理雲母チタン、アルミニウムパウダー等の光輝性粉体類、ステアリン酸マグネシウム、ステアリン酸亜鉛、N-アシルリジン、ナイロン等の有機粉体類、有機タール系顔料、有機色素のレーキ顔料等の色素粉体類、微粒子酸化チタン被覆雲母チタン、微粒子酸化亜鉛被覆雲母チタン、硫酸バリウム被覆雲母チタン、酸化チタン含有二酸化珪素、酸化亜鉛含有二酸化珪素等の複合粉体、ポリエチレンテレフタレート・アルミニウム・エポキシ積層末、ポリエチレンテレフタレート・ポリオレフィン積層フィルム末、ポリエチレンテレフタレート・ポリメチルメタクリレート積層フィルム末等が挙げられ、これらを1種又は2種以上を用いることができる。また、これら粉体は1種又は2種以上の複合化したものを用いても良く、その表面を油剤処理、シリコーン化合物処理、フッ素化合物処理、金属石鹸処理、界面活性剤処理、アミノ酸系化合物処理、水溶性高分子処理等を施してあってもよい。

30

40

【0012】

水性成分としては、水に可溶性成分であれば何れでもよく、例えば、エチルアルコール、イソプロピルアルコール等のアルコール類、プロピレングリコール、1,3-ブチレングリコール、ジプロピレングリコール、ポリエチレングリコール等のグリコール類、グリセリン、ジグリセリン、ポリグリセリン等のグリセロール類、ソルビトール、マルチトール、ショ糖、でんぷん糖、ラクチトール等の糖類、グアーガム、コンドロイチン硫酸ナトリウム、ヒアルロン酸ナトリウム、アラビアガム、アルギン酸ナトリウム、カラギーナン、メチルセルロース、ヒドロキシエチルセルロース、カルボキシメチルセルロース、カルボキシビニルポリマー、ポリビニルアルコール、ポリビニルピロリドン、ポリアクリル酸ナトリウム等の水溶性高分子、塩化ナトリウム、塩化マグネシウム、乳酸ナトリウム等の塩

50

類、アロエベラ、ウィッチヘーゼル、ハマメリス、キュウリ、レモン、ラベンダー、ローズ等の植物抽出液等及び水が挙げられる。

【0013】

界面活性剤としては、化粧品一般に用いられている界面活性剤であればいずれのものも使用でき、非イオン性界面活性剤、アニオン性界面活性剤、カチオン性界面活性剤、両性界面活性剤等が挙げられる。非イオン界面活性剤としては、例えば、グリセリン脂肪酸エステル及びそのアルキレングリコール付加物、ポリグリセリン脂肪酸エステル及びそのアルキレングリコール付加物、プロピレングリコール脂肪酸エステル及びそのアルキレングリコール付加物、ソルビタン脂肪酸エステル及びそのアルキレングリコール付加物、ソルビトールの脂肪酸エステル及びそのアルキレングリコール付加物、ポリアルキレングリコール脂肪酸エステル、蔗糖脂肪酸エステル、ポリオキシアルキレンアルキルエーテル、グリセリンアルキルエーテル、ポリオキシエチレンアルキルフェニルエーテル、ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油、ラノリンのアルキレングリコール付加物、ポリオキシアルキレンアルキル共変性シリコーン、ポリエーテル変性シリコーン等が挙げられる。アニオン界面活性剤としては、例えば、ステアリン酸、ラウリン酸のような脂肪酸の無機及び有機塩、アルキルベンゼン硫酸塩、アルキルスルホン酸塩、 α -オレフィンスルホン酸塩、ジアルキルスルホコハク酸塩、 β -スルホン化脂肪酸塩、アシルメチルタウリン塩、N-メチル-N-アルキルタウリン塩、ポリオキシエチレンアルキルエーテル硫酸塩、ポリオキシエチレンアルキルフェニルエーテル硫酸塩、アルキルリン酸塩、ポリオキシエチレンアルキルエーテルリン酸塩、ポリオキシエチレンアルキルフェニルエーテルリン酸塩、N-アシルアミノ酸塩、N-アシル-N-アルキルアミノ酸塩、 α -アルキル置換リンゴ酸塩、アルキルスルホコハク酸塩等が挙げられる。カチオン界面活性剤としては、例えば、アルキルアミン塩、ポリアミン及びアルカノールアミン脂肪酸誘導体、アルキル四級アンモニウム塩、環式四級アンモニウム塩等が挙げられる。両性界面活性剤としては、アミノ酸タイプやベタインタイプのカルボン酸型、硫酸エステル型、スルホン酸型、リン酸エステル型のものがあり、人体に対して安全とされるものが使用できる。例えば、N,N-ジメチル-N-アルキル-N-カルボキシメチルアンモニウムベタイン、N,N-ジアルキルアミノアルキレンカルボン酸、N,N,N-トリアルキル-N-スルフォアルキレンアンモニウムベタイン、N,N-ジアルキル-N,N-ビス(ポリオキシエチレン硫酸)アンモニウムベタイン、2-アルキル-1-ヒドロキシエチル-1-カルボキシメチルイミダゾリニウムベタイン、レシチン等が挙げられる。

【0014】

紫外線吸収剤としては、例えばベンゾフェノン系、PABA系、ケイ皮酸系、サリチル酸系、4-tert-ブチル-4'-メトキシジベンゾイルメタン、オキシベンゾン等、保湿剤としては、例えばタンパク質、ムコ多糖、コラーゲン、エラスチン、ケラチン等、酸化防止剤としては、例えば α -トコフェロール、アスコルビン酸等、美容成分としては、例えばビタミン類、消炎剤、生薬等、防腐剤としては、例えばパラオキシ安息香酸エステル、フェノキシエタノール等が挙げられる。

【0015】

本発明の睫用化粧料としてはクリーム状、ゲル状、液状のマスカラ等が挙げられる。

【0016】

【実施例】

次に、実施例及び比較例を挙げて本発明を更に詳しく説明するが、本発明はこれら実施例等に何ら制約されるものではない。

【0017】

実施例1~7及び比較例1~6 水中油乳化型マスカラ

表1に示す処方のマスカラを調製し、睫に塗布し、睫を上にかールする化粧効果やボリュームアップ効果、塗布時の使用性・使用感、仕上がり膜の均一性や、化粧持ち効果について下記の方法により官能評価を行った。また、経時安定性及び樹脂臭のなさについても下記の方法により評価を行った。それらの結果もあわせて表1に示す。

10

20

30

40

50

【 0 0 1 8 】

【 表 1 】

No.	成 分	実施例							比較例					
		1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5	6
1	ステアリン酸	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
2	カルナウバワックス	4	1	4	4	3	4	4	4	4	4	4	1	4
3	ミツロウ	6	3	6	6	4	6	6	10	6	6	6	3	6
4	セタノール	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1
5	モノステアリン酸グリセリン	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1
6	キャンデリラゼン*1	8	16	1	8	20	8	8	—	—	—	8	—	8
7	キャンデリラワックス	—	—	—	—	—	—	—	—	8	—	—	—	—
8	ロジン酸ベンチエリスリット	—	—	—	—	—	—	—	—	8	—	—	16	—
9	ショ糖脂肪酸エステル	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5
10	モノオlein酸ホリオキシエチレンソルビタン	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5
11	ビスオlein酸ソルビタン	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
12	黒酸化鉄	10	—	10	—	10	10	10	10	10	10	10	—	10
13	青色1号	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
14	黄色4号	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
15	酸化鉄被覆雲母チタン	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—
16	ホリエチレンテレフタレート・アルミニウム・ホリキシ積層末	—	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	—
17	精製水	残量	残量	残量	残量	残量	残量	残量	残量	残量	残量	残量	残量	残量
18	球状粉体*2	5	7	3	1	—	—	—	—	—	—	—	7	—
19	球状粉体*3	3	5	—	4	3	—	—	—	—	—	—	5	—
20	球状粉体*4	—	—	—	—	—	3	2	—	—	—	—	—	—
21	球状粉体*5	—	—	—	—	—	2	6	—	—	—	—	—	—
22	不定形粉体*6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8
23	トリアノール7ミン	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1
24	1,3-ブチレンジグリコール	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
25	アクリル酸アルキル共重合体イマルジョンホリマー(固形分28%)	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
26	ホリ酢酸ビニルイマルジョンホリマー(固形分40%)	15	15	25	15	10	15	15	15	15	15	15	15	15
27	ビニルピリドン酢酸ビニル共重合体液(固形分50%)	—	—	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
28	ナイロン繊維(10デニール、3mm)	—	—	—	—	4	—	—	—	—	—	—	—	—
29	カルボキシルホリマー	—	—	—	0.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—
30	防腐剤(パラキシ安息香酸メチル)	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量
31	美容成分(ヒアルロン酸ナトリウム)	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量	適量
評価														
(a)	化粧効果(カール効果)	◎	◎	○	◎	◎	◎	○	×	△	○	○	○	△
(b)	化粧効果(ホリューム効果)	◎	◎	○	◎	◎	○	◎	×	△	○	○	○	△
(c)	塗布時の使用性・使用感	◎	○	◎	○	○	○	○	△	△	△	△	△	×
(d)	仕上がり膜の均一性	◎	○	◎	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×
(e)	化粧持ち	◎	○	◎	◎	◎	◎	◎	△	○	×	△	△	△
(f)	経時安定性	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	△	○	○	○	△	◎
(g)	樹脂臭のなさ	◎	◎	◎	◎	○	◎	◎	△	△	×	◎	×	◎

10

20

30

40

50

【0019】

* 1 : キャンデリラレジンの組成は、樹脂分 90%、遊離アルコール 5%、遊離脂肪酸分 2%、エステル分 2%、炭化水素分 1% であり、軟化点は 47 ~ 48 である。

* 2 : 無水ケイ酸 (平均粒子径 4 μm)

* 3 : シリコン樹脂粉末 (平均粒子径 4 μm)

* 4 : ナイロン (平均粒子径 12 μm)

* 5 : セルロース (平均粒子径 0.5 μm)

* 6 : 無水ケイ酸 (平均粒子径 4 μm)

【0020】

(製造方法)

A. 成分 (1) ~ (11) を加熱溶解し、成分 (12) ~ (16) を加えて均一に混合する。

B. 成分 (17) ~ (31) を均一に混合する。

C. A に B を加え、乳化する。

D. C を容器に充填し、製品とする。

【0021】

下記評価項目について各々評価を行った。

(評価項目)

(a) 化粧効果 (カール効果)

(b) 化粧効果 (ボリューム効果)

(c) 塗布時の使用性・使用感

(d) 仕上がり膜の均一性

(e) 化粧持ち

(f) 経時安定性

(g) 樹脂臭のなさ

(評価方法)

【0022】

10名の官能検査パネルにより、各試料を上記 a ~ e について、下記絶対評価を用いて 7 段階に評価し、各試料ごとの評点の平均値を 4 段階評価基準を用いて評価した。但し、e については、試料を使用後、パネルに通常の生活をしてもらい、6 時間後の化粧効果について評価した。

f、g の項目については各試料の 40 で 1 ヶ月保存の状態を観察し、室温保存品と比較してそれぞれ下記 4 段階判定基準により評価した。

【0023】

(化粧効果評価)、(使用性・使用感評価)、(化粧膜評価)、(化粧持ち評価)

絶対評価基準

(評点) : (評価)

6 : 非常に良い

5 : 良い

4 : やや良い

3 : 普通

2 : やや悪い

1 : 悪い

0 : 非常に悪い

4 段階評価基準

5 点を超える : 非常に良好 :

10

20

30

40

50

3 点を超えて 5 点以下：良好 ：
 1 点を超えて 3 点以下：やや不良 ：
 1 点以下 ：不良 ： x

(経時安定性評価)

非常に良好：

良好 ：

やや不良 ：

不良 ： x

(樹脂臭のなさの評価)

臭わない ：

やや臭う ：

臭う ：

非常に臭う： x

【 0 0 2 4 】

本結果から明らかなように、本発明品である実施例 1 ~ 7 の水中油乳化型マスカラを用いた場合は、比較例 1 ~ 5 に比較し、目元をはっきりさせるといった化粧効果や塗布時の使用性・使用感、仕上がり膜の均一性、化粧持ちのすべての点ではるかに優れた特性を有していた。また安定性や臭いの点においても優れていた。

一方、比較例に示したように、従来のワックスや樹脂等を用いたマスカラは十分な化粧効果が得られず、多量に配合した場合は使用性及び安定性に劣っており、球状粉体を用いなかった場合は使用性や使用感において満足のいくものが得られなかった。

【 0 0 2 5 】

実施例8 油中水乳化型マスカラ

(成分)	(%)	
(1) 軽質流動イソパラフィン	15	
(2) デカメチルシクロペンタシロキサン	10	
(3) 黒酸化鉄	10	
(4) キャンデリラレジン*1	25	
(5) 有機変性ベントナイト	5	10
(6) ポリオキシエチレン・ メチルポリシロキサン共重合体	1	
(7) ジイソステアリン酸ポリグリセリル	1	
(8) 精製水	残量	
(9) 塩化ナトリウム	0.5	
(10) 油溶性アルニカエキス	0.1	
(11) フェノキシエタノール	0.3	20
(12) ビニルピロリドン・スチレン共重合体 エマルションポリマー (固形分40%)	10	
(13) ポリエチレンテレフタレート・ ポリオレフィン積層フィルム末	2	
(14) ベンガラ被覆雲母チタン	5	
(15) 球状粉体*2	0.5	

(製造方法)

A. 成分(1)~(7)を加熱溶解し均一に混合する。

B. 成分(8)~(15)を均一に混合する。

C. AにBを加え、乳化する。

D. Cを容器に充填し、製品とする。

以上のようにして得られた油中水乳化型マスカラは、睫を上にかールしたりボリュームをもたせたりといった化粧効果や、目元に輝きを持たせるという化粧効果に優れ、塗布時の使用性・使用感や仕上がり膜の均一性、化粧持ちに優れ、経時安定性、臭いの点においても良好なものであった。

【0026】

実施例9 非水型マスカラ

(成分)	(%)	
(1) 軽質流動イソパラフィン	30	
(2) デカメチルシクロポリシロキサン	残量	
(3) 黒酸化鉄	10	
(4) キャンデリラレジン*7	0.4	
(5) ロジン酸ペンタエリスリット	4	10
(6) 有機変性ペントナイト	5	
(7) 架橋型シリコーン樹脂	2	
(8) ジメチルポリシロキサン	6	
(9) 油溶性アルニカエキス	0.1	
(10) フェノキシエタノール	0.3	
(11) ポリエチレンテレフタレート・ ポリオレフィン積層フィルム末	2	20
(12) ベンガラ被覆雲母チタン	8	
(13) 球状粉体*3	3	
(14) 球状粉体*8	2	

*7: キャンデリラレジンの組成は、樹脂分65%、遊離アルコール18%、遊離脂肪酸分9%、エステル分5%、炭化水素分3%であり、軟化点は35~40℃である。

*8: ポリスチレン (平均粒子径4μm)

(製造方法)

A. 成分(1)~(8)を加熱溶解し均一に混合する。

B. 成分(9)~(14)を均一に混合する。

C. AにBを加え、混合する。

D. Cを容器に充填し、製品とする。

以上のようにして得られた非水型マスカラは、睫を上にかールしたりボリュームをもたせたりといった化粧効果や、化粧持ちに優れ、塗布時の使用性・使用感や仕上がり膜の均一性及び目元に輝きを持たせるという化粧効果に優れ、経時安定性、臭いの点においても良好なものであった。

【0027】

【発明の効果】

本発明の睫用化粧料は、目元をはっきりさせるという化粧効果があり、塗布時の使用性・使用感や仕上がり膜の均一性、化粧持ち、そして安定性、臭い、安全性にも優れたものであった。

フロントページの続き

(72)発明者 中林 治郎
東京都北区栄町4番18号 株式会社コーセー研究本部内

審査官 大島 忠宏

(56)参考文献 特開平11-012132(JP,A)
特開平11-060438(JP,A)
特開平08-268841(JP,A)
特開2000-119139(JP,A)
特開2000-319132(JP,A)
特開平11-236307(JP,A)
特開平11-236315(JP,A)
特開平03-209308(JP,A)
特開平11-349446(JP,A)
特開平06-172126(JP,A)

(58)調査した分野(Int.Cl., DB名)

A61K 8/92
A61K 8/06
A61K 8/89
A61Q 1/10